

平成 29 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同研究班」 研究報告書

平成 30 年 4 月 10 日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究		
担当者	氏名	所属機関・職	
	岩下 明裕	北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・教授	
班員	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	醍醐 龍馬	大阪大学・法学研究科・助教	日本政治外交史、日露関係史
	研究テーマ		
	樺太千島交換条約に至る明治維新时期日露関係		

研究成果の概要

本研究の目的は、1875 年の樺太千島交換条約に至る明治維新时期日露関係を、英露対立の国際情勢の中で検討することであった。特に、本条約交渉の前史に当たる時期の日露交渉とその意義を今回の分析対象とした。

具体的には、国立国会図書館、横浜開港資料館、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター図書室、北海道大学附属図書館北方資料室、北海道立文書館などで日英露の史料を調査した。例えば、開拓使岡本監輔が残した史料を収集し、雑居地樺太の実情を考察していく足掛かりを得た。その成果の一部は、東アジア近代史学会で報告予定である。また、19 世紀に刊行されたロシアの雑誌から樺太に関する論考を複数収集し、樺太に対するロシア側の見方を把握した。ロシア側にとって樺太が、宗谷海峡の確保のために重要な役割を持っていたことが改めて裏付けられた。新聞資料からは、樺太を完全に雑居地化した 1867 年の樺太島仮規則に対するロシア側の評価を知ることができた。また、イギリス外交文書(F0.46)の収集により、日露交渉に対するイギリスの視点を把握し、日露の史料と突き合わせながら、その位置づけを明確化した。その結果、研究途上にあった外務卿副島種臣による日露領土交渉の検討を終えることができ、学会誌への論文掲載が決定した。従来の明治初期日本外交史では、樺太放棄を日本側に勧告したイギリスの役割が強調されがちだが、副島外交の分析からは日本側の自主性が浮き彫りになった。

また、今後、樺太千島交換条約後の日露関係を検討していく準備として、宮崎県飫肥にある国際交流センター小村記念館を訪問し、展示物を観覧しながら 1905 年のポーツマス条約や小村寿太郎についての理解を深めた。本調査により、樺太千島交換条約で形成された日露国境が、日露戦争により再変動する過程を明らかにしていく契機を得た。今後の研究に繋げたい。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

〈雑誌論文〉

「外務卿副島種臣と日露領土交渉―樺太千島交換条約への道筋―」『国際政治』191号、2018年。
(謝辞なし)

〈学会発表〉

「明治初期日露関係の形成―樺太千島交換条約とその時代―」国際政治学会、2017年10月28日。
(謝辞なし)

〈ポスター発表〉

「世界の中の日露国境交渉史」第2回大阪大学豊中地区研究交流会、2018年1月10日。(謝辞なし)

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

平成30年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「プロジェクト型「外交官から見た近代日露関係史」（代表者：醍醐龍馬、アドバイザー：岩下明裕）

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。